繪本豊臣勲功記

九編

四

へ 13
2209
84

繪本豊臣勲功記九編巻之四

目録

武蔵守信蕃令土佐守感

附内府賞罰

秀長九州出馬耳川對陣

附黒田斜戦

へ遠13 特 2209 84

秀吉公昇関白大政大臣　一
附九州御陣
貴田孫兵衛於小倉驚殿下　二
附統治由来

繪本豊臣勲功記九編巻之四

武蔵守信蕃令土佐守感　属　内府貫嗣

櫻澤堂山　删補

是父なりせば是子なりと。その子なりせば是父なりとハ。長曽我部父子を指べし。然れども土佐守元親ハ。吾子に別れて大友仙石僚を救んと。退来る敵を十四遠まで捲返し。後を見れバ大友僚ハ。遥に落延よりたりしもえ。今ハそや心寧しと。小旗き丘に自勢を退揚。吾子信親と一隊になり返退さんと待といえども。吾子ハ勿論従士一人も返来らず。信親こそハ戦死せしやと。中嶋大和守を呼して。戦場の相を窺せ去むるに悲しひるに信親主従。血大

浸血場を
尋て中島
大和守主
君信親の戦
死に傷腸
百断も

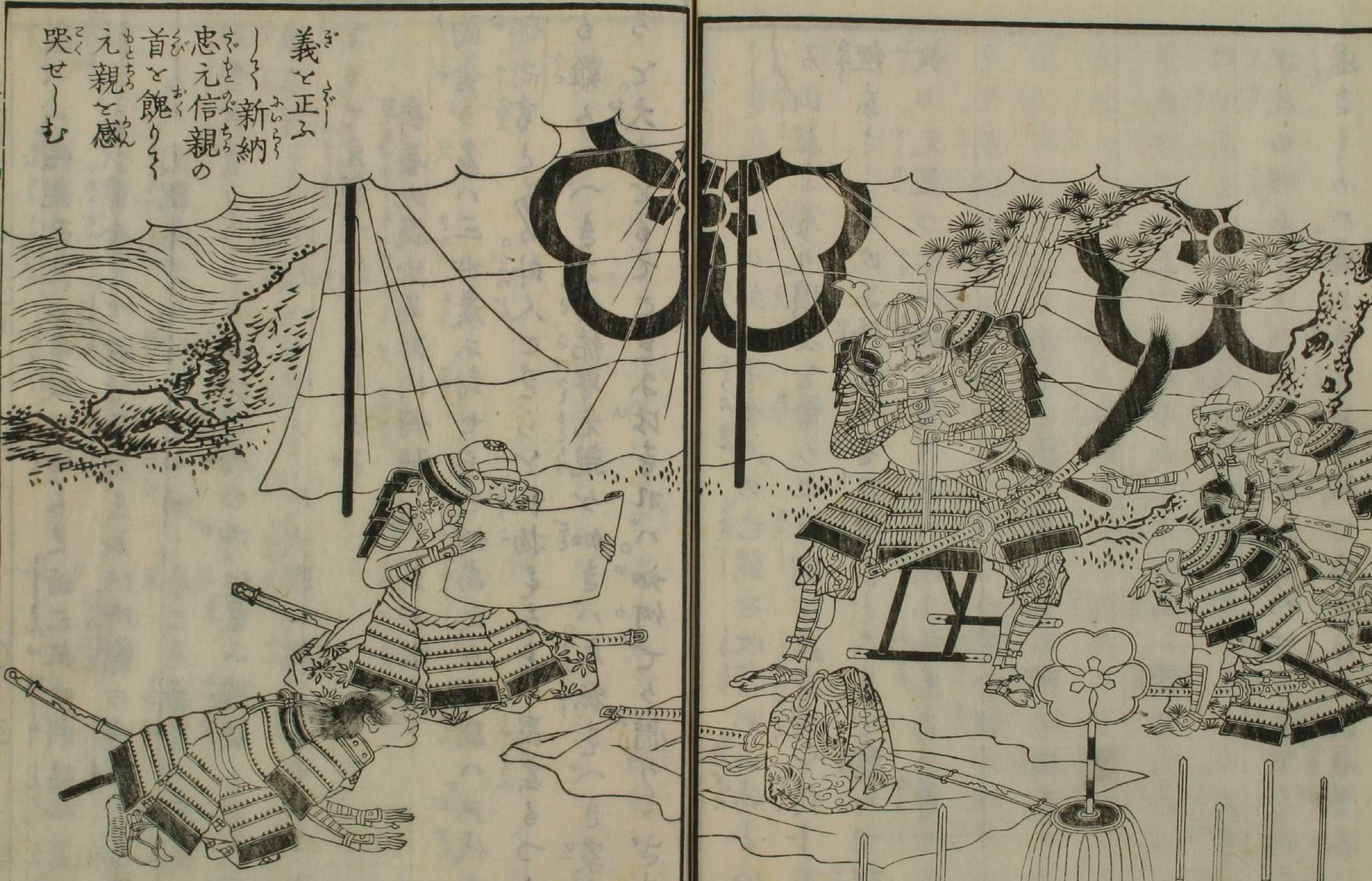
場に潔死なしければ。中途なく立帰り。戦場の相を報
げるにぞ。有様の元親大に驚き。且嘆じて悶絶をべふな
しけるを桑名丹後守十市新左衛門等介抱なし。薬なん
ど服させしかば。元親漸然と涙を流し。吾子ながらも伝
親ハ。義勇軍略ひとに勝れ。澆漓しふおもひけるゆえ。
此度九州下向にも。渠一個を下さんには。短慮の所為も
ありなんと心許なく内府に帰ふて。父子一斉下向ひし
も。去ばらの愁なからしめんがためなるに。豈知らん
や今日の。一戦場に死せんとハ。かえすがえすも悔憾しふ。
悲しきことハあらざりけり。もつとも臆病と笑をもて。逃
躱れんにハ勝りぬれども。今更詮なきことは懐えざ

りしと我をとられて。愁傷なしけるぞ理りなる。諸士老党
も一斉に涸濯を浸しける。斯る所へ島津勢も羅り迯
るにぞ。何思ひけん土佐守馬牽を待てうち跨り鑓を提げ
跪出をと。十市桑名推留め君にハいかがなしさまふ。定
で俤公の亡びたまふを。なだめかせさまひ共に逃せん懐念
にやおんねらん。御悲哀ハ然ことながら。御父子共に逃
し玉ハず。長宗我部の家名も滅びなん世俗嘲て只一戦
に島津勢のさめに驚て謀なきよなど。誹謗せられもん
も。最悔憾しふひそぞや。一応此をあらぞきさまひ。這地
を内府へ云状なまハぞんバ亡俤公の軍功も幻沫如露
となりねらん。君にも似気なき御料理止りさまえと諫

められバ。元親しぞく歎息して。猶も向ハんとなしけるを。十市新左衛門主人の馬の轡を採て無體に押留ゑ退きければ。桑名丹後守中島大和守山川五郎左衛門横山九郎兵衛ら諸侍踏止て追来る敵を遮り防ぎ。三四遍など返々しく。主人元親の跡を慕ふて沖の濱まで落延たり。茲に新納武蔵守忠元ハ。信親主従が戦死の潔きを感歎なし。弱年なれども一國の将たり。別て無双の勇戦に。信義を守りし戦死なれバ其首ならびに家臣の髑髏等閑にすべからず。畢竟をいふときハ。秀吉の指揮に随ひ。下向なしつるものなれバ恨むべき敵にあらず。されバ是も正しく義を感ずるの心と示し。懇切に送葬をべ

しと信親その外八十余人の亡骸を收集め。山崎といへる山根に葬り。墳墓を築かせ浮圖を建宗僧を請じて讀經なさしめ。次に信親の太刀鎧などあまた哀めて櫃に收め。元親が方へ贈らしけれバ。諭に情志ある勇士なりとて。新納が義心を感じけり。偖も這遍合戦の次第を備に内府の御聞に達し。元親只管敗軍の罪を謝したりけるに。仙石三好大友等が敗軍の罪を罰せしめ。所領を削らる。御勘當を蒙りぬ。然るに大友義統ハ。兼て太閤殿下より

の旧家なりとて。這遍の罪を赦されしかども。其後朝鮮征伐の時。ふたゝび臆病の挙止ありて。自方と遠く退きしかバ。遂に大友家を滅せられけり。偖長曽我部元


義を正ふしく新納忠元信親の首を餽りて元親を感哭せしむ

親へハ。信親戦死の弔使を贈られ。贈三位中将信心君の
謚し玉ひ黄金三十枚を香奠し玉ひ。御懇の感帖を賜り
しかバ。元親愁眉を開きし心地し。今こそ吾子が戦死の。
功労顕れしと悦び内府の御仁恵に感伏しけり。其
後内府より信親への賞として大隅の國におゐて一郡
をもて元親へ賜りけるとぞ

秀長九州出馬耳川對陣属黒田斜戦

陶舎が家ハ三世豪に封ぜられ何尚之が子孫ハ。五代吏
部尚書となる。外人これらを称揚すなれバ。昇雲もつと
も難かるべきに。土佐守元親が如きハ名称すべき家な
るを。大友とてこれに比すれバ。如何でか惜からざる

べかんや。然れども島津の大軍勝に乗じて。陣営を進め。
府内。高崎等の城を乗取り。豊后國中に横行して。猛威を
恣にせしかバ。従来大友所属の城〻悉ことぐ島津
に降るものによつて大将義久驍悦すること斜ならず。
直地に筑前筑後までも。乱入せんと思ふといえども。年
稍暮に近ふして寒風太しかりけれバ。諸軍の労を休め
しめ。拐綱に陣を搬されて越年に及びけるが。鈔納川
上。町田侍ハ久次境まで殺投して威を振ること弘大な
り。然るに此年も晩畢て。天正十五年の春なりけれバ。義
久即地に諸方の敵を攻靡かんと心構ありといえども。
遠く他國に進むも危ふく。まづ根を固ふせんにハ如か

ぞと。日豊後を攻取しける。然れども内府秀吉公へ。かれらの趣を旧冬より頻に注進ありける由え御心係せ玉ふといえども。遙く九州えの御出馬なれば。御留守の儀容易からず。まづ大和大納言殿を御下向なさしめ。然して御準備とゝのひ次第に進発ましまさんと。九州下向の趣を秀長卿へ令ぜられ。天正十五年二月十日大坂の城を発軍せらる。相随える門々には。浮田秀家宮部善祥房。木下備中守。尾藤甚右衛門。南條伯耆守を始めとして。紀伊大和阿波讃岐美作因幡の諸軍勢六萬余騎を倶従なさしめ。九州へ下られけるが。同月廿五日にハ。豊前の國湯の岳に着陣ある。時に小早川隆景吉川元長同元信（吉川元春ハ去天正十四年十一月十五日五十七才にて逝去あり元長家督を）紹め黒田孝高侍従に来りて。秀長卿に謁しけれバ。毛利黒田が去年の軍功を褒賞せられ。暫くありて人馬を休め。當日と定めて府内に推進せ。島津勢と交戦せずやと軍の評議に迨ぞける。這回島津義久ハ豊後の敵を拘し。前國ともて攻取んと。軍議あるところへ。秀長の大軍下向と聆。従来狂て島津方に降参しける輩も。忽地心強くなりまふて。食変心の色を顕し。島津に敵対せんと企改。義久これを怒るといえども。今更なすべき般もなく。却てハ自方同前に疑発の軍出来らん。又心の者後に塞がり。筑紫の大軍前より進なバ。進退ここに極まんぬべ

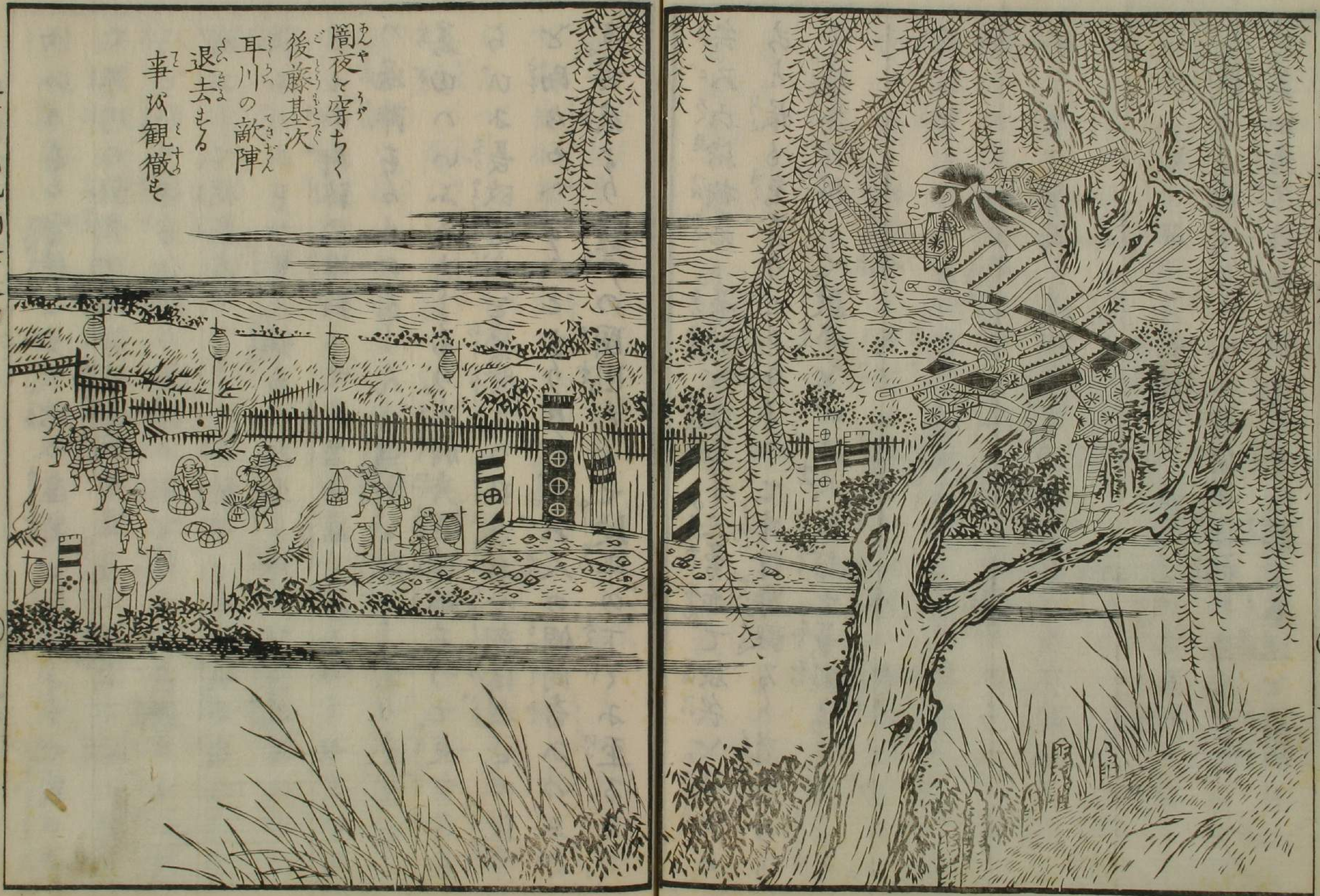
し。先や危急に臨まざるうち。一應薩摩へ退入て。撃べき
時節をお待べしとて。道路に待武者或ハ合伏の助勢の
隊伍を部らせ。島津中務太夫家久に後距なさしめ。義久
みづから先陣を行て。三月朔日杉細の陣を引拂ひ。次第
なざひに退陣なしたるが。これまで島津に降參せし輩倫
遠所邪所に蜂起して。義久が勢を遮へたれども。彼行嚴
重なりたれバ。大將などの嶮難も。恙なく越て佐伯が勢
を退散し。日向の國まで退きたり。然に島津右馬頭新納
武藏守町田出羽守川上上野介等ハ。久次境に在陣し
たるが義久よりの告によりて。切が布に在陣なしたる伊
集院筑後守とお伴ひ。道路を遮たる一揆輩を。此に蹴散

し。彼所に屠り。肥後の國まで退陣して。合子の城に籠り
たり。斯て又大納言秀長卿ハ。湯の岳に陣せしも。島津が
退去を聞とひとしく。先逃殿にもべしとて。卒示に諸陣
え徇ひ。粗然として出馬あり。島津勢の跡を追ひ。榛に
揉でぞ進発ある。勢威破竹の如くにして。大將の猛所も
打越。日向の國へ推進たり。此時島津義久ハ。恙なく日向
と大隅の間亀沢と云所に陣所を結び。敵の進るを待が
なるにも中務家久ハ日向口なる。耳川の城に對嶷守宮
城にハ三原彈正らさく守りて。上方勢を遮んとも。秀長
の先陣吉川元長速くも耳川の此方に馳着。川を渡て戦
ぞんとせしに早川隆景これを制して。跡忽に河を渉させ

ざれバ各河を前にして汐手に陣を結ぶ。然して大将秀長卿ハ其夜諸将を召集め軍の評議に逮ばるゝが。夜も稍更中に至らんとする刻頃黒田の勇士後藤基次。いづくよりか帰り来り。黒田長政を閑所に請じ。言を密めて語るやう。小居甲斐より敵の挙動を量察に。斯般ごくに退散なさバ必定勝利あんぬべし。已に河の端塁をせしに。深きところもいまだ夜の暁天に撃て出なば寡にして多勢を破らんこと容易ふいありと冷きたる孝高も。頷て後藤が謀るところハ究竟あるおとくなれバ。あるもと聆て太に歓び。その准備をぞ為たりける。斯て諸将中務ハ耳川の城に凝守こと。三日三夜なりけるが。され

体ことを得ざればなり。然ども敵を迎ふべき。要害の城にもあらざれバ。上方勢を欺て。退ぞろぞやと計議を設け。昨日ハ伏兵などを構え。河前面の敵を欺り。後来らバよく撃べし。備後ざまんバ退陣せんと。両端ともて謀るに。敵主人も洩さゞるゆえ。暁れバ三月六日の卯天耳川の城を引払ひ。佐土原指て退ひけり。茲に黒田吉兵衛長政ハ。後藤基次の勧めにて。同日の夜の寅の刻より。耳川の近方に馬を駐在敵の挙動を窺ふところに。耳川の城爆ゝとして本丸の四炎上しけれバ。其ぞや敵こそ退取なれ追撃せよと一番に河を渡と推渉し。楼に操て退跑せり。続て黒田三左衛門。後藤名吉清を殿として。栗山後

中。毛利右馬頭の勢ハいふもさらなり。中國勢上方の先隊十万余人一同に河をさして追詰る。中にも黒田長政ハ自勢三百ばかりにて。息をも次ず正斜に島津が後陣へ速くも追着。舊然として擲て蒐る。中務大輔家久ハ斬まで敵のをそふるに。逆来るとハ思ひ設らねバ。後路を拒抗准備もなく。殊に黒田が斬ばかりの小勢なりとハおもひも付ねバ。隊伍を紊して退て行。長政ハ係氣の少年軍なれバ。そゞろに陣を夾長に採て。跡の自方も顧ず。度二度三に突投るゆゑ。敵の多勢に捕捆られ。既に危く見ゆる所え。後藤又兵衛基次。黒田三左衛門孝成馬を並べて馳来り。双方一地に突投して瞬間に敵兵五六騎撃落し。長政を救出し。三勇並て敵兵を。追詰る事と最も急なり。これによつて島津勢敗るゝ者甚多かりぞ。後藤指揮して士卒を四五人活捕せ。長追なさバ過失あらんと。退螺吹て自方を纏め。御本陣へ捉卒を繋がせ。島津勢なにゆゑに恐しく退去しけると活捉の兵に鞫問しけれバ。士卒們さえて。別に思緯ハあらねど原来佐土原の要崖ハ。島津中務の本城なるゆゑ。快にも退く後なれども。敵の来るに听怖して。逃るといそもん枵憾しきに暫く耳川に對陣せり。然ども御勢耳川を渡して出戦なさゞるゆゑ。不意に退収ハなりと。答るを聆てて黒田孝高。後藤が軍慮の量を感じ。基次を遠席に招き。



闇夜を穿ちく
後藤基次
耳川の敵陣
退去もる
事以観徹を

汝いかなる方便ともて敵の虚実を知りけるや。然ハ頑て耳川の對戦を。法軍窃疑ひあるゆゑ。乃士甲叔に他志もぞ。川と渉て那方に到り。敵陣の相を窺ふに。夜戦の準備堅固にして。伏兵あるかしこに設けけるハ。昨日自方川と渉らバ。是を撃ん備なるらん。又手陣々を囲繞るに。いづれも小荷駄の準備して。火急に退く熊なりしゆゑ。明日ハ退陣するものならんと。謀計を献せしなりと。宗をに黒田ハいふもさらなり。大将秀長感佩あつて。又名清ならびに長政孝成を褒賞あり。又手名今朝活捉する。敵卒と助けかへさんとありけれバ。五人の個同音にいふよう。古来より薩摩の国風として。敵卒の下々に至るまで。

敵に活捉れし輩ハ。再び帰りし例なし。然ばとて降参もせず俺們助命しかてハ。國の恥辱にひえバ。快く首を刎らるべしと。些も畏るゝ相なきに。上方の諸士これを聆て。孫々薩摩の勇猛ハ。称するに猶剰りあり。敵卒までも斬の如く命をかろんど義を重んず。誠に敵軍稀なりけりと。その強猛の程を感じ。敵卒を殺すに忍びざりしを。五人甚しく又ふ伏して。自害せしこそ哀れなれ。中國上方の諸軍勢ハ。直地に佐土原へ推進んと。次第を行て進むところに。一座の山の中腹に。固く構えし孤城あり。是三原渡辺山田針助が對凝守る城なり。最も要崖堅固なれバ。容易く陥べき城ならねど。捨おかバ后の災ひならん

と。えぞく術を施して。攻悩をといふといへども。急に陥る栖もなかりしが。百重に囲みてえぞくれ。干戈を交へるもなかりし

秀吉公昇関白大政大臣 属 九段御陣

鳳凰鳴ね。彼高岡に梧桐生ずり。彼朝陽に華々萋々たり。雖々喈々たり。未だ有なるかな内府秀吉公その身匹夫より出身して。織田家に仕官速くも播磨の領主となり。信長亡びたまひて后。天正十年逆臣明智を誅伐して主君の仇を報ひまゐらせ同十一年北國の審議。柴田勝家を攻亡し。小國一統に平均なし。おなじく十二年勢州より返して。紀州を征治し。同十三年四國を征して。長曽我部

父子を帰服なさしめ。今西海を静謐ならしめんと欲しさまふに大際日本十が内に八九を得玉ひ。武威徳光日日に盛にして。天下に肩を並ぶるものなし。殊に今上を尊ミ下民を憐ミたまひしかバ。上ハ天子を敬めまゐらせ。公々殿上人より下万民に至るまで一途に心を同ふして。誠に天の佐せる名君也え摂家清花（摂家とハ近衛九條二條一條鷹司の五家なり清花とハ久我三条西園寺徳大寺花山院大炊御門今出川等の花族之）其外諸々。登儀ましまし中に抽て。九條殿宮によう。保元寿永の昔より。今天正の年間まで。天下の逆浪止むことなきに藝しく。も秀吉といふ名将出来て。天下に普ねく人に和し。上と敬ひ。民と水火の中に救ひ。甚徳天下に弥浸せること。尽露

の百穀を養ふがおとし。此者を関白職に昇らしめなば。公家武家を兼原の如く王代となさんと。頗るうさがひおるべからず。此職いかにと命セある。張卿奥口同音に談じく。此言道にかなえる最理なり。宜しく料理玉なるべしと。詮議此に定りたるにぞ。此趣をもて天氣と伺ひさてまつり。秀吉を召て。志きりにおもむきを進むるといえども。満るは缺の理と称して。志ぞく御辞退ありたるが。菊亭右大臣晴季公懇〻かえすぐも御勧めありたるにより。十四年九月十六日関白職に任じ玉ふ。秀吉もありがたき旨。勅答なしさてまつり。翌日入觀しさまふ時。借奉の個々も口宣頂戴を。その任官の御々に ハ

尾張内大臣平　信雄
大和大納言豊臣　秀長
備前宰相　同　秀家　浮田貞家之長子
加賀少将　同　利家
丹波少将　同　秀勝　御次丸是也
能登侍従　同　勝俊
岐阜侍従　同　輝政　後作播广之太守
源吾侍従　同　長重
三好侍従　同　信秀
津侍従　平　信包

越中侍従　豊臣　利長
京極侍従　同　高次
金山侍従　同　定次
伊賀侍従　同　忠政
曽根侍従　同　貞通
敦賀侍従　同　頼隆
河内侍従　同　秀頼
丹後侍従　同　忠興　細川与一郎是也
松任侍従　同　長重
松嶋侍従　同　氏郷
北庄侍従　同　秀政　堀久太郎是也

東郷侍従　同　秀一
此外加藤。福嶋。片桐。糟谷。脇坂。石田。小西。増田。浅野。蜂須賀。堀尾の倫。此日を晴と衣紋襞に繕ひ。履取太刀持の雑人まで。はな〴〵しき行粧なり。二条の城より御参内の道條ハ。その坊〻の店を飾り。老女男女貴賤といはず。群聚を許さるゝ事と。正あるまじき縡なりとて感拝してぞ悦合れる。禁内の首尾を済れしバ。東西南北の諸大名。同く御悦賀の登城ありて。門前に市をなせり。然れバ天下の政る事秀吉公一人に及び玉ひ。まづ五奉行と定め玉ふ。その個〻にハ。浅野弾正少弼長政（甲斐にて二十一万石天下の公家武家の出目附なり此人ハ尾州津嶋の富家又右衛門の子系太郎の政所殿の従弟なり）の前田徳善院法印玄以

丹波亀山の城主にて万石なり公家寺社方の雑務を司る京都の所司代として六十余州神社仏閣の事をあづかる且太閤薨去以前に職を辞し隠居して正没せり　石田治部少輔三成（江州佐和山の城主十八万石天下の諸代官及諸勘定役として太閤の蔵納所をも司る最老臣家の大忠臣とせり）増田右衛門尉長盛（和州郡山の城主二十万石太閤内所の執事天下の女中奉行大坂の留主居なり）長束大蔵大輔正家（山州淀の城主八万石太閤の諸道具預り普請奉行又大坂町外下人支配公事裁許人なり）此の五人をもて五座一職に定めしめ。毎事執行せ玉ふとなり。其外五老三老をさだむ。三老ハ家臣なれども。五老ハ天下の大職として前田。長尾。浮田。大江。大神なり。また三老ハ堀尾帯刀先生吉晴生駒雅楽頭秀成中村式部少輔一氏をもて任職せしむ。時に殿下熟く思案をめぐらしたまふに。近代まで世の末となり。王威おとろ

え。武の権勢を専にせざんバ治国の遠謀成がたからんと。京都に城郭を築かせられ是を聚楽と号けさせ玉ひ。此所城に居在て公武の政事を兼行なせ玉ひしかバ。威勢ハ此公卿人に逮しさせ玉ふ。そもそも聚楽の結構といつパ。当天ハ天正十三年の春（関白昇進に先立こと一年なり）内野に城郭の営を思召立たまふ（内野今此名なし実ハ大内野なり是則大内裏の址なる也元慶長年中にいたるまで野となりて内野の舊跡内の芝生なと和哥にも也聚楽ハ一条より二条へかけて大宮通の西北野右近の馬場の馬出町四方の内なり今もおちらく絶て八町あり延多八東におり）此事成就に及びなバ。必ず行幸を進めさせてまつらんと。其底志深くおはして里第を構ふること。最も堅牢なり。四方三千歩の石の築垣山のごとく。両道の門には楼を聳

豊臣殿下
九州御下向
に道通赤
間関阿弥
陀峯に攀
玉ふて
安徳帝の
御陵を
拝しあふ

鏤塩洞扉鬼神も通ぜず。瓊殿瑶閣星月と輝やきて。雲を穿つ玉の甍は。白虎清風に長嘯し。水に莅む金の欄には春龍香気に燔爇を添ふ。所は悉皆織塵日の檜扇門。格子の間の口方格子は。紫金の鈎に掛連ね。妻戸の間の御車寄には。天台山の瑪瑙石を布極めり。それぞれの庭上の舞台左右の楽屋後宮深室にいたるまで。百工手匠擬を竭し佐を殫し。花とも雪ともその色その光艶喩に物なく。長廊を歩して楼閣に到れば。都卒の天宮も斯やと観れ。正殿より林泉に除めば。蓬莱の園苑も奇妙と徴に足らずとおもえり。古よりの結構おほしといへども。九段の下向の事いとゞ遅滞に迨びしとあり。加之殿内の

政事を執掴え。今年天正十六年の春より。志きりに九段御進発の事を急がせ玉ひ。まづ先軍として御舎弟大納言秀長卿を。先達て下し玉ひ。続て御出馬あるべしとて。御治の事ども。前田利家に命付らる。おなじ三月の上旬。に御出馬あり。供奉しまゐらするには。近江中納言秀次。次々前田肥後守利長。蒲生飛騨守氏郷。丹羽加賀守長重。加藤主計頭清正。同左馬介嘉明。福嶋左衛門太夫正則。浅野弾正少弼長政。細川越中守忠興。片桐東市正且元。池田三左衛門輝政。同侍従中守長吉。佐々陸奥守成政。堀尾帯刀先生吉晴。山岡対馬守。一柳生駒雅楽頭秀成。中村式部少輔一氏。筒井伊賀守定次。石田治部少輔三成。大谷刑部少

輔吉繼。長束大蔵少輔正家。増田右衛門尉長盛をはじめとして。田中。京極。一柳以下都合其勢十三万五千余人。三月朔日京都を御進発ありて。隊伍整々として陸地を遥に下らせたまふ。道すがらの名所舊跡を御覧ありて。三月廿二日周防の國に着したまへバ。毛利輝元山口の御旅館に請じまいらせ善美を尽して饗応なしたてまつる。時に長曽我部元親も。すでに馳来て殿下に謁し。先日の敗北の罪を謝し。直地に御供に加はらんとす。輝元も供奉しまいらせて。廿六日赤間が関に着陣したまひ。阿弥陀が峯に入御なつて。安徳帝ならびに女院。そのほか平家の舊跡を御覧あり。同月廿八日にハ豊前の國小倉の城に御着陣したまひけり

貴田孫兵衛小倉謁殿下　属　統治由来

帳下の東風奇城を開き。揚兵の皓月巌城を照せバ。實に群公の武徳を称するの聯句に付するとも可ならん歟。さるほどに関白太政大臣豊臣秀吉公ハ。三月廿八日豊前の國小倉に着御したまふ所に。立花左近将監宗茂ハ。筑後の主よりすでに来り小倉の城代立花三河守益時一斉。城中に迎えまいらせ。山海の珍味をあつめ。御饗応をまいらせける。時に立花左近将監。殿下の前に召出亭主役をお勤め心を尽して馳走なしぬ。殿下も大に喜悦ましく。返すぐも御感の余と慕り落涙なして謝し

奉り。薦て言状まいらせたる。這に存じ付る事のはい
と珍らしき勇士あり。いかにも扶持しさふらえども。彼
者述懐ありて私に随身つかまつらず。徒に土民の間に交
居を凛い元来小倉に領分の百姓なり。甚孝行の心深く。
殊に廉直剛毅の性にて。老母に仕え孝者の名さふらひ
しが。去年老母の柩送りし。も家業を務るに不思議にも
神力を得て。希代の勇士にはなりと言状あれども秀吉
公委細にこれを聞しめされ何さまめづらしき者にこ
そ急ぎ召せとの命を奉ずる。家人に下知して呼寄さす。
抑此木田孫兵衛清続治といえる者は。筑前の国毛谷村の
産にして幼き時父に別れ一個の母に養育せられ名を

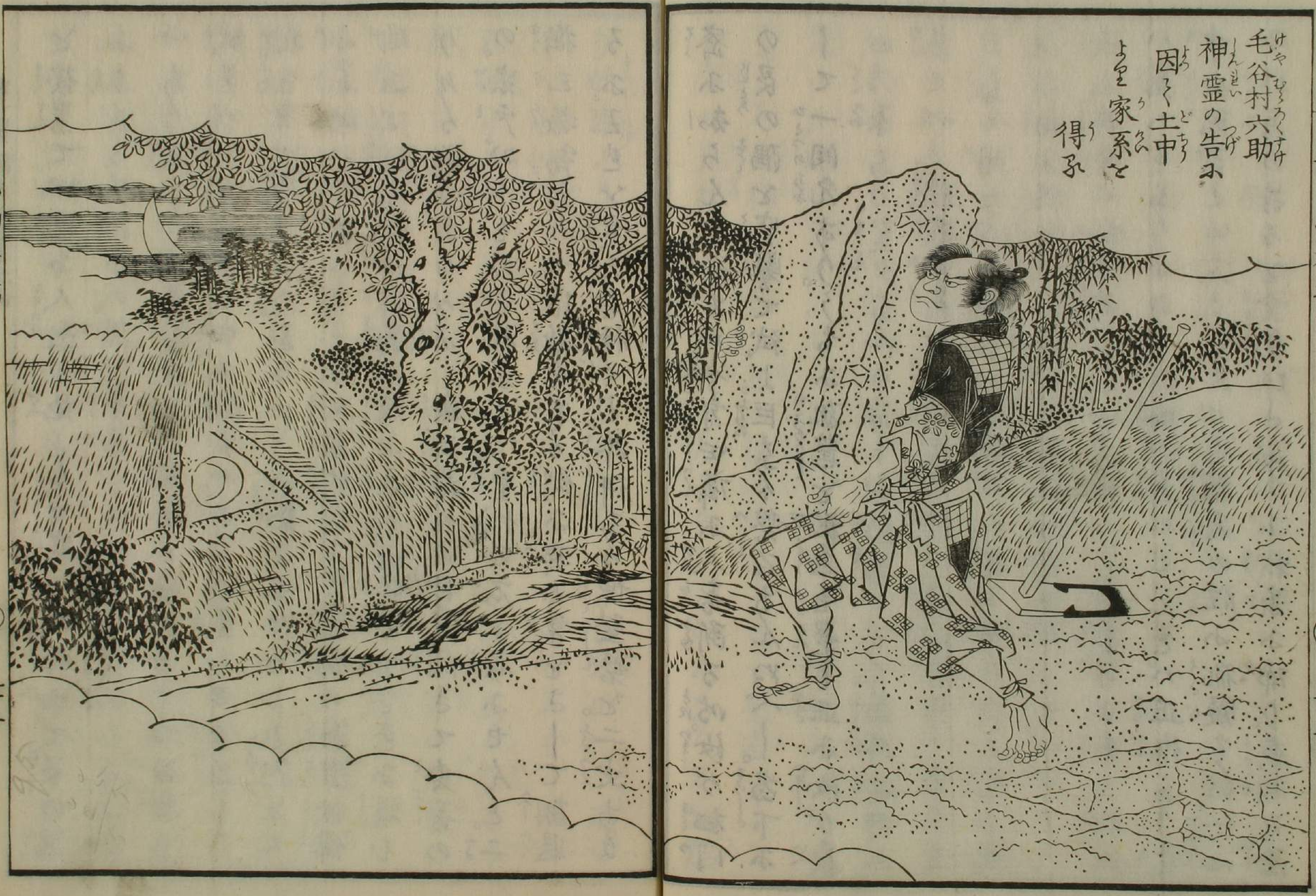
六助と呼成され。母の長六尺一寸あり。生得廉直無邪に
して。ことに孝心深かりければ。貧き活計なれども母
を孝養つるのことを。隣にもおさくめならざりけり。農業
に出る時は。母を負て往来の時も傍を離ることなく。如
何なる得分つくることありても。決して遠く出ることなし。
されに依て遠近の風俗。六助が孝心を賛称する流殊い
とく弘ごりければ。小倉の城主立花益時凛と召さも
て褒孝の引物贈らせ且悍勇惜しく家臣として扶持
せん旨を申せるといえども六助は唯孝を捨るに忍び
ずして。今備国主に勤力せば。母を養ふ手疎かり。忽母に
孝養へんずれば。忠心おろそかなるらん。況に忠孝は両な

がら全ふしがたしと。領主の下知を奉ざりし。然るに六
助熟々世間を考察に近来天下おだひに乱れて又に擾
ざるに場もなく。木樵草刈の稼業も。青雲の道を経るもと
多なりし。君も先祖は由緒ありて品くだりある家にはあ
らじと老母の語るとも聴ど。猶細にハ今らざむ従ふ土
民の游泥に交らひ。別て貧き活計まる。如意なりざる憂
世にぞある。然れバおもふとも技能なくして。武家に奉公
も果しがたく。由緒ありねバいつまでも。田夫の嘲弄が
とぞ。いと拙懐きことにこそ。とりてき心苦しきハ戦国
の世に御邦とりて耘耕の業自由なりねバ。老ふる母も
安穏に哺ことを得ざりしむ。況系図も知よろし。数し

の能も発露なしバ。よき階位にも昇らんものと。暁に
夕に思連ける。当年の秋のえじめ。老母病痾に犯されて。
起臥飲食も侭ならねバ。六助ハ昼夜手当万苦し。術を尽
して看病しけれども。定業遁るゝに道なくして。七月廿一
日といふ暁天落梧の露にぞ先逝ける。六助の悲嘆ゝぞ
えもつくせざ悶絶まるむかりありしが。同姓並延の丈
子奴子等に慰められつゝ殯りし。おとねもおろ
なる燈菜番に花に水よ茶よ百日過る其間ハ昼夜十二
時懺悔に念仏の声ぞ断ざりける。殊に三年の忌まで術
く斧の柄に手觸て渓岩を穿ち薪を採り。そを売て活
計しけるが。一時樵伐の帰路に。彦山（同国別にあり）田川の麓を過

るに奇異なる形様の翁に逢ぬ。頭ハ清らかなる白髪に。身にハ整しき装束して。外目もせず立ながら。六助殿と折屋へ行かんと志る時。翁あがらかなる声音して。六助まちねと喚かけぬ。いぶかしさつゝ顧て。底事にやと跪居老翁咳くとして宣く。汝が性質直質にして。やさしくも孝を竭しけるゆえ所希を愜え得させん。さへ快より此に相俟り汝心中にその初より。先祖の系図とも知り。そのうへに武士の郷とも嘗まん志念あり。信義忠孝ハ天道の宣制にかなふれバ。これを行ふ人民にハ天よりなかなかぞ幸福しるべ。汝が微心天帝これを感応ましまし。汝が先祖の由緒を告しめ。さるふところあり。それを續

密に知らんと欲せバ。今宵四燐に人音断る時。汝が柵門の艮の隅を穿鑿て試よ。巨なる盤石あんぬべし。其下にして一洞穴あり。そのうちに孤篋を秘蔵せり。是ぞ正に汝が家の伝系なり。朝夕なんかなゝぞ秘篋をもて荐再返所に来るべし。精密由来を説所えん。種々授与ものゝあまたど。当て用るべき膂力を附授せん。近に倚りねと云ながらに。六助に総祖がせ左右の腕に秘呪を印して。いでく去ぬ。再会の期を失なといふ声ハちや雲ゐに去て。神秋ハ見へずなりにけり。六助ハ夢かとみれバ正作なり。云中合嘆ぞといふといえども戇直の性に狐疑なく。一心に神翁の告るを全受ひさぶるに我家に帰り。夜闌る際


毛谷村六助神霊の告に因て土中より家系を得る

を後果て口辺に人影の絶るを窺ひ。御捧出て艮の隅に立たる虚株木の。根を辛労じて五六尺穿凹むるに物のあり果して些も教示の品よと。御放下しつ按撈り試れバ。四方の径口四五尺もや。あらんと覚ゆ巨石なり。独立身の膂力にハ。なかなかに動きもやらじと。呆果て小姿時ハ忙然たりしが。又忽然として肩臂の筋骨快偉風に張紀る。徳ハ神翁の詞に遠まで膂力を得まに揚むりたるよ。吁ありがたし這石除んと。巨擘開きて身姿のの。岩戸がしそのそれならで。重代の石を手に手にせんと。二揺三振動付かせ。壌離ちきる側に突と掌をさして翻退るに。王ちを覚えぞ恠くと。牛許なる埋堅磐を二丈あまり将除たり。六助もこれなが。奇きるに思ひつつ。石の下を視て見れバ。土龍の穿ちるもやと。れかふむりの孔開たり腕差伸探索りみれバ一合の筐ぞある。蓋さも遅しと繙ろぎて下弦の月に挑なひ見るに家の伝系の一巻と覚ゆ。名傍に筥のあるを。探揃て蓋捨除れバ。ふくろに投たる太刀ありけり。六助思まで雀躍して。天に拝き地に礼き。両の筐のさうら齎将て。亡父母の碑前に跪き。生在人にもの言ふごとく。石中の歓を演つつも。其夜ハつや〳〵寝もやらで。暁ハいまで日着ろを待煩ふて。彦山の麓にふるび参来なりるが。神翁ハ逸速く候在さまへり。六助疾視て忽地土居晩夜のありし物語を告

一巻と刀を探霧神翁が前に位ふれバ。先系譜の秘巻并を一尋なかりに繙開かせ。そもく汝が性とするハ。人皇八代孝元天皇の後胤武内宿祢の苗裔にして。紀姓にあれバ。近世多流の四姓源平藤橘より。選におがまる貴き家なり。浩る子孫の雄士なれバ。これ今宵より三七夜がる武術名学残りなく伝授せん。努く懈怠ことなかれと。言听せるに六助ハ。長夜の眠の覚るがごとく。峯の雲谷の朦昧一時に晴て。瓢方の天を瞻仰心地し。歓喜て当夜より毎夕参詣学ぶこと。三七夜に及びけるが。既満足の夕にあたり。神翁なほさらに告言しさまふ。汝が武術已至極を。以来のこゝろすれ自を慎て。汝に勝さる英雄なけれバ。そ

ともて主とし身を立よ。苟且の言にも競ることなかれ。嬌慢と発て功に溢り。己を忘れて貪らバ。災禍忽地其身に仇せん。かまへて〳〵忘失莫秘ともて附するも。汝が至信と感ぎれバあり。耶告これこそ高良の大の神使なりと。いふ日に翁欣ハ瑞煙の目にも止らぎ消になりれハ。いともいとも奇怪なりかり斯て浪右立花益時。志むく招くといふといえども高良の神の教示を守て自己に韜る者ならざれバ陸侍せる古ともありがたき由来告申せるに六助と立花の精士十八個まで構武競術なさしめけれども。皆て勝事なかりしとぞ。古れによりていよく増く三河守にハ信愛せられ字を賜て貴田孫兵衛続治

孝勇子六助精神を凝しく高良神使の妙術を授る

とぞ名乗らせける。然るほどにこのたび豊臣殿下。御下向ありしかば。立花宗茂御前にて孫呉清が事を上聞志ければ。さっそく渠を召寄給ひ熟くと御覧ずるに。身の長六尺に三寸もあまりて骨格など〳〵英雄の相あり。殿下御感ありて〳〵ぞ御賞美おはしませのあまりに御宴の御盃を賜り汝其並の練武志ながらなどて田丈の群に埋て益時所が宮に遠きるぞ。これなどんど汝が勇武を等閑に寄きぐすに忍びぞ。方僅多の俸禄を宛へ。なほ懇切を速るの紹には。國まも郡まも知行めんとおつきるあり。汝己れを主として足らずとする所もあらじ。如何にやあると宣ふと起孫呉清平伏て言さく。

冥加にあまりてありがたく。歓涙痩襟に溢るゝなり。可畏くも御諚を頓に領掌まべきに遑なけれど。そのはじめより先師の命にいともかしこき教戒ありて即答もうしがたくさぶらう其ゆえハ武術これに結縁する英雄によりて奉公せよとのおしえになん。決して我言に誇るにあらず神勅と固持のことありのまゝに言状しければ。殿下ましく御機嫌麗しく。のぞみのごとく幕下に具しける。諸侯の英士雄臣をえりぬきなんどが練手に幸むかれせん。何をがなと御思案あり。叶ありく。抵角の技こそよかんめれ。とさ名軍中の保害さらんと立ち荒家に命ぜられて。その准備にぞ造られける

絵本豊臣勲功記九編巻之四了